

本学では基礎修練と称して数名の医学生が数カ月、丸一日教室に研修に来ます。他の教室では実験補助をしながら、自らの成果を取りまとめる作業を行うわけですが、わが法医学分野では医学部の中でも独特の実務活動（すなわち法医解剖）を行っているため、できるだけ解剖補助に参加してもらっています。そして2カ月も経つと学生は教授に気楽に話しかけるようになってきます。



学1) 「先生はどうして法医学なんかに進まれたのですか。」

教授) 「ふつう尋ねる時は、どうして法医学に進まれた、だろう。」

学2) 「将来の道として、法医学も考えているんです。」

教授) 「まずは臨床の道を選びなさい。どうせ臨床医学を学ぶと臨床が面白くなるし。」

学3) 「先生の若い時は結構推理小説をお読みになったんでしょう。」

教授) 「いや、読もうとしたこともあったけど、医学生時代に法医を勉強してから殆ど読まなくなったなあ」

ということで、ここからが本題。なぜわたしは推理小説を読まないのか。

推理小説の醍醐味の一つはアリバイ崩し。早朝死体が発見され、地元の医者が呼ばれます。死体を視た医者が答えるには『まあ、昨日の午後9時から11時までの間に死んだんだな』。3日後の捜査会議。担当の警部が上司の警視に、『容疑者が1名いるのですが、この時間帯の前にこの町から出ていく汽車に乗っているのが目撃されているようです』、『では外すしかないな』、『いや私は彼しかいないと思います』と、大抵は狭い範囲での死亡時刻が前提となって、そのアリバイ崩しが始まります。

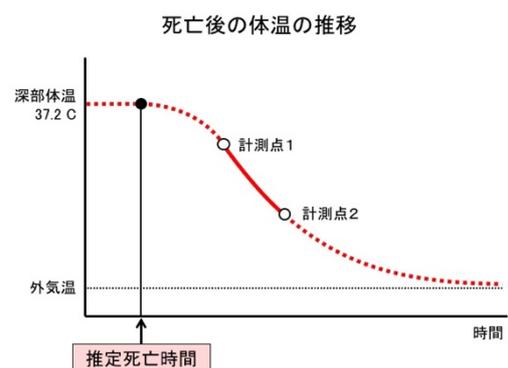
実際に法医学者が経験する症例の多くは、自宅や屋外での死亡した方々です。当然、遺体からは正確な死亡時刻、即ち心臓の止まった時刻など分かるはずはありません。しかし、殺人事件では必ずと言っていいほど、捜査員が法医学者にその時刻をうるさく尋ねます。

ところでわれわれ法医学者はどうやって死亡時刻を推定するのでしょうか。ヒトが死を迎えるということは、心臓が止まり、体中の血液の流れが止まるということです。その結果、全身の血

液は下方に貯まり（死斑の発現）、筋肉は固まり関節が強張ります（死体硬直）。ヒトが亡くなってから生じるこういった死体の変化を死体現象と呼びます。亡くなって1日以内であれば、上述した変化が徐々に進行しますので、その中途の段階を評価し、大凡の経過時間を決めるわけです。しかしいずれも強い・弱いといった主観的な判断にとどまる以上、細かい時刻の絞り込みなど困難です。従って、せいぜい半日～1日位とか、1～2日位とか。これではアリバイ崩しもなにもあったものではありませんが、これが現実です。

では推理小説では本当に死亡時刻ネタで書けないのでしょうか？

ヒトが亡くなるとエネルギーの産生が止みます。通常、私たちの体の深部の温度は平熱で37.2℃前後です。そしてヒトが死ねば、極端な環境でなければ体温が徐々に降下していきます。体温は数値で評価できますから、この降下時点での体温を遡り37.2℃との交点を結べば、そのヒトの死亡時刻になるはずで



のところ、この理論に基づいた死亡時刻推定法は、私が法医学の世界に足を踏み入れた40年前から考えられていました。しかし実際はあまり役に立ちませんでした。それは遺体の搬送などによる外気温の変化、体内温度を測るための棒状温度計の直腸内への挿入位置や温度計自体の精度、更にせいぜい数回の測定回数、などにより、測定値にかなりばらつきが生じます。しかも、捜査員や検事、弁護士は結果として出される〇時△分という値に、それが絶対的なものとして囚われてしまうという厄介な問題が生じます。これでは法医学者が偽りのアリバイを作り出してしまってもかもしれません。

ところである日、当教室の教員（現在は某大学の教授）が興味深いものをネットで見つけてきました。通称は温度データログという名で外見は右写真のようにボタン電池のようですが、その実体はメモリ付き温度計です。パソコン上のデータログ管理ソフトで設定すると、1週間分の温度データを5分間隔で記録することができます。メモリ内の保存数は大凡2000個で、順に古い記録から重ね書きされ、約4年近く持ちます。死体発見



後、できるだけ早くに直腸深部に挿入し、解剖時に回収してその間の連続的な体温下降を記録します。この記録を元に37.2℃との交点に向かうように近似線を引けば、死亡時刻が得られます。更に遺体のそばに外気温用のデータログも併せて置けば、外気温の変化を経時的に追えるので、

途中から冷蔵保管庫への安置など大きく外気温が変化する前までの直腸温値を利用すれば、より本来の死亡時刻に近づくことが予想できます。

実際に、春や秋などの適度な外気温下で、かつ死亡後1日前後の遺体にこの温度データログを利用して1時間前後の誤差の範囲で得られた死亡推定時刻が、後日容疑者の供述などで判明した真の死亡時刻に重なった症例を多数経験しています。残念ながら経費の問題で、データログを県下全ての警察署に常備しているのは、ここ宮城県でしかありません（もっとも、宮城県警は一切購入に係わっておらず、あくまでも本分野からの貸与です）。

ということで、条件が揃えば温度データログの利用によって、『まあ午後9時から11時までの間に死んだんだな』が現実になるのです。もし、小説内で死亡時刻の推定に温度データログが使われていたのであれば、それはかなり斬新な法医学知識を身につけた作家であり、であればその作品をちょっと読んでみようと思うかもしれません。